

1 研究の内容

(1) 研究テーマについて

多様な他者と関わり互いに理解し合おうとするとともに、地球に生きる一市民としてグローバルな視点をもって考え行動しようとする子どもの姿を目指し、昨年度、本テーマを設定した。ここでの「グローバルな視点」とは、「世界の様々な文化や習慣、価値観を尊重し、様々な背景をもった人々と共に生きていくための広い視野」を示す。本部会で目指している具体的な子どもの姿は、下表の通りである。

- 身近な事象について、異なるものと出合い体験することによって、自分のことばや文化と比べながらそれぞれの特色をとらえようとする
- 多様な価値観があることを、体験を通して知り、それぞれを大切にしようとする
- 自分と「世界」との関わりを見つめ、「世界」に生きる一人として行動しようとする

昨年度の研究においては、様々なテーマで触れた世界の文化や習慣について、自らのものと比べながら類似点や相違点を考えたり、その背後にあるものをとらえようとしたりする子どもたちの姿をみることができた。一方で、外国語を使った言語活動とのタイアップの仕方やその比重の置き方について課題が残った。そこで今年度は、言語活動の充実を図りながら研究テーマにせまることができるような外国語活動について研究していくこととした。

(2) 研究の視点

上述したような子どもの姿にせまるため、次に挙げる3つを大きな柱としている。

①「ことば」への「引っかかり」を広げる

様々な言語に触れることを通し、日本語も世界で話される言葉の一つであるということに気づき（あるいは再認識し）、音や文構造などにおける他言語との相違点や類似点を見つけたり、物事のとりえ方にも違いがあることに気づいたりする体験を大切にす。そうした体験は、日本語についての認識を更新したり、ことばの奥深さに気づいたりすること、また、ことばの学びをさらに深めていこうとする学習者を育てると考える。

② 関わりの中で試行錯誤する

自分と異なることばや背景や考えをもつ他者を受容し、積極的に関わり合おうとしたり、臆せず自分の思いを伝えたりしようとする態度を育てるとともに、体験を通してその方法を学ぶことができるようにしたいと考える。うまく伝え合うことのできない体験から言葉を補う様々なコミュニケーション・ツールの存在を知ったり、それらを実際に試してみることでその意義を実感したりすることが重要であると考える。

③「世界」を自分事としてとらえる

広く世界に目を向け、様々な文化・歴史的背景をもった人々が共存する社会に生きていることに気づくとともに、互いのよさを大切にしながら共によりよく生きていこうとする態度を育てたいと考える。様々な学習活動の中で他国の文化や習慣に触れる際には、日本のそれらを常に比較するようにし、そこからそれぞれの特色を受容しようとしたり、共感的に理解しようとしたりすることができるようになっていくことを期待している。

昨年度から引き続きこれらの視点を大切に考えて学習活動を進めると同時に、今年度は外国語の学習における言語活動と世界の文化や習慣をとらえて考えを深めていく異文化理解の活動との関係性を整理し、実践を通して具体的に考えていくこととした。

本校の外国語活動部会では、外国語を使ったコミュニケーションを、【言語を運用する力】と【異文化理解】とが両輪となって支えることによって行われるものととらえている。ここでいう【言語を運用する力】とは、文字や音声、語彙や表現、文構造などを理解すること、またそれらを使って聞いたり読

んだり話したり書いたりすることを指す。しかし、こうした力だけでは相手と真に思いを伝え合うコミュニケーションを図ることは難しい。同じ母語をもつ相手とのコミュニケーションにおいても単に言葉を組み合わせて発話し合うだけでは気持ちが通わないのと同様に、外国語に関する知識を持ち合わせているだけでは真のコミュニケーションを図ることはできない。相手の真に意図しようとしていることを想像して理解しようとしたり、それに応じて自らの思いがより伝わるようにするための方法を選択したりして意思疎通を図るだろう。しかし、母語の異なる相手との場合においては、互いが「当たり前」としている前提から異なるということがある。そうしたことも含め、世界の人々にはそれぞれに様々な習慣や信条、大切にしているものがあることなどを知らうとしたり、自分と異なる背景について理解しようしたりする構えをもっていることが不可欠であると考える。こうしたことを【異文化理解】としてとらえ、【言語を運用する力】と併せて学習を展開していくことを大切にしたいと考えている。

【異文化理解】についての子どもたちの学びには、次のような変容過程が見られることを昨年度示した。

- A：異質なものと出会う
- B：体験し、それまでのイメージとのギャップに気づく
- C：相手（他国の人）の立位置に自分を置き、自分（日本人）をメタ的にとらえる
- D：日本の文化や習慣、他国の文化や習慣の意味や背景を知る
- E：自分自身の認識の変化（イメージの更新）をとらえる

Barnett (1997) によれば、多様化するグローバル社会には、既存の知識、自己、世界をクリティカルに見つめ、よりよいものを創り出していく「クリティカルな存在 (critical being)」が求められるという。そしてそのためのクリティカリティには、知識 (knowledge; critical reason)、自己 (self; critical self-reflection)、世界 (world; critical action) の3領域と、各領域において4つの発達段階 (① critical skills, ② reflexivity, ③ refashioning of traditions, ④ transformatory critique) があるとしている。Barnett は知識 (理性)、自己 (内省)、世界 (行動) の3領域において4段階の成長をなすことで、グローバル社会が必要とするクリティカルな存在になり得るとしている。上述したような子どもたちの学習に見られた変容の中にも、これらに当てはまる部分があると考えられる。そこで、これらの姿をとらえるを意識し、学習活動を進めていくこととした。

また、Canale & Swain (1980 他) はコミュニケーション能力 (Communicative Competence) を、言語学的能力 (Linguistic competence)、談話的能力 (Discourse competence)、社会言語学的能力 (Sociolinguistic competence)、方略的能力 (Strategic competence)、背景知識 (Knowledge of background)、推論力 (Inference) によって構成されると述べている。本部会では、この「背景知識」を知識に留めたものではなく、上の傍線部分で説明したようなもの (【異文化理解】) としてとらえ小学校段階では主に言語学的能力 (【言語を運用する力】) と背景知識を同時に育てていくことが有用であると考えている。また、これらの能力はそれぞれに独立せず、相互に往還し合うものでもあるととらえている。もちろん、【言語を運用する力】にはいわゆる文法などのような「言語についての知識」が前提となるが、日本語と比べたり、それぞれの言葉の背景にあるものと出合ったりしながら学習することができるようにすることを心がけていきたい。これは「言葉」を「文化」に含まれるものとして考えることにもよるであろう。

(3) 「外国語活動」における「学びをあむ」

外国語との出会い、外国の人々との出会い等を通して感じたり考えたりしたことを、日本語や日本人としての自分と結びつけ、関係づけながら考えようとする子どもの姿を目指したい。

他国の人々の立場に立って考えながら理解しようとしたり、自分自身と比べて考えることによって自身を見つめ直したり、それまで「当たり前」と思ってきたことの意味を問い直したりすること、そして新たな視点をもって物事を見ようとしたり、その意味を見出したりしながら学びをつくっていく姿を「学びをあむ」姿ととらえている。また、学んだことを活かして子どもが自ら活動をつくり、友達や様々な他者と協働しながらさらに自身を深めたりしていこうとすることができるような外国語の学習を目指していきたい。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) 「身の回りにある『外国語』」(第5学年)

アルファベットの名前と音を使ったジングル (We Can! の Alphabet Jingle) をしていた際、「コアラとかイグアナとかって、英語でも日本語でも同じなんだね」という声が挙がったことから、①英語と日本語とで同じもの ②英語と同じ言い方もするが、他の日本語もあるもの ③日本語では全く違う言い方をするものに分類してみることにした。すると、以下のような分類表がつけられた。

①	②	③
ink jam orange pen racket vest yo-yo	apple bear cat dog hat king milk net queen up watch box	elephant fan goat sun ten zebra

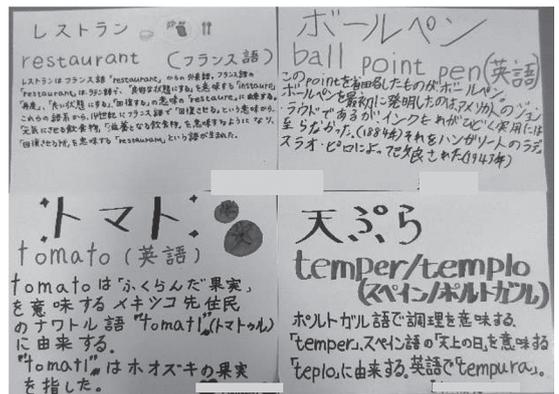
そこで②について、どのようなときに「英語」を使っているかと問いかけてみた。例えば、bear では「ベディ・ベア」、cat では「キャット」フード・・・などと挙がる中、以下のようなやり取りが行われた。

<p>C1 : dog で、ホット「ドッグ」！ C2 : えー、でもそれって「犬」じゃないでしょ？ C3 : 「熱い犬」って変じゃん。ソーセージは犬の肉じゃないしさ。 C2 : ドッグじゃなくてホット「ドック」じゃない？ C1 : そうかも。じゃあ「ドック」って何だ？</p>	<p>C4 : 同じ dog についてで、人間「ドッグ」もそうだと思います。 C5 : 人間ドッグ・・・人間「犬」！？ C6 : ドッグじゃなくて「ドック」じゃなかった？ T : 「ドック」って何？ C6 : なんか病院でやるやつだから・・・あ！ドクターのことじゃない？</p>
--	---

そうして、その日の家庭学習で子どもたちはそれらの疑問について調べ、次時に「ホットドッグ」については、もともと長いソーセージを表していてその形がダックスフントに似ていることから dog が名前に入っていること、つまり「ドック」ではなく「ドッグ」だということが確認された。また、「人間ドック」については、船の修理等を行う設備 dock に由来しているのだから「ドック」であることが確認された。そして、それぞれの由来に納得するとともに、語尾の一文字の濁点がつくつかないかで大きく意味が変わってしまうことへの気づきが生まれていた。

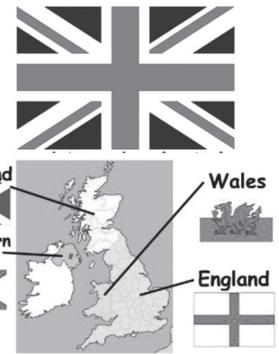
このような語尾への意識は、日常的に見られる子どもたちの日本語において、あまり高いとは言えないと感じることがある。例えば、「ベッド (bed)」を「ベット」、「バッグ (bag)」を「バック」と書く子どもは多い。それは、日本語として話している中ではどちらで読んでもさほど音においても意味においても違いを感じることがないからであろう。しかし、このように音に着目して考えてみる体験をすることにより、より言葉への「感度」が高まり、日常的にも引っかかりをもつことができるようになるのではないかと考えた。

そこで、「身の回りにある『外国語』を見つけよう」という課題を投げかけ、いわゆる「外来語」をその由来とともに見つけて整理する活動を始めた。すると、パフェ (フランス語)、瓦 (サンスクリット語)、イクラ (ロシア語) などと英語だけでなく様々な国の言葉が日本語としても使われるようになっていくことが分かり、まずその事実に対する驚きを表していた。それから、原語の発音と比べて互いの類似性や変化を楽しむんだり、どのように日本に伝わってきたのかということに興味をもったりしていた。これは「身の回りの『外国語』辞典」として各学級のオリジナルことば集とし、毎回の授業の初めに2～3個ずつ紹介することにしていく。日常の中でも「これは何語？」と調べようとしたりする姿が見られるようになってきた。



(2) 行事をきっかけに「世界」と出会う (第4～6学年)

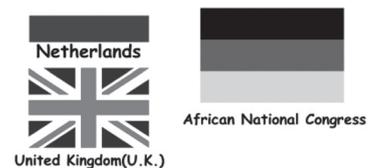
日常的に子どもたちが異文化と出会う機会をキャッチし、学びの契機とすることを心がけている。今年度はラグビーワールドカップが日本で開催されたこともあり、子どもたちもその多くが高い関心をもっていった。そこで、日本チームが対戦する日程が近づいた頃を見計らってスコットランドと南アフリカを取り上げた。スコットランドについては、地図上でその位置を確かめるところからスタートし、イギリスの国旗や国歌と比べながら国の成り立ちについて考えたり、「蛍の光」や「故郷の空」などの聴き馴染みのある曲がスコットランドの民謡であることを知ったりした。これらの活動は、スモールトークの形態をとり、全て英語で行った。



次に対戦した南アフリカについては、子どもたちから声が上がリ、取り上げることにした。前回同様国歌を聴くことにより、子どもたちはそれが5つの言語で歌われていることに気づき、多言語国家の存在を知った。「なんで一つの言葉じゃないの!」「いろいろな言葉を話す人たちのなかで生活するって、どんな感じなんだろう? 困らないのかな!」「全部の言葉(言語の意)を使えないといけないんじゃない?」などと様々な問いが生まれ、南アフリカについてさらに深く知ろうとする子どもたちの姿が見られた。それは調べ学習へと繋がっていき、アパルトヘイト政策に関心をもって皆で人種差別について考えた学級もあった。



また、第4学年で郊外園に出かけサツマイモを掘るという行事に合わせて、ALTから出身国スペインでのサツマイモ料理について話を聞くということもあった。子どもたちはその多様さに驚きながら、話の中で多用される“sweet potato”という言葉に関心をもった。お菓子の「スイートポテト」ではなく「サツマイモ」を指していることは、子どもたちにとっては驚きが大きかったようで、自らALTに日本の「スイートポテト」やその他のサツマイモの食べ方を伝えようとする姿がみられた。



他にも、ハロウィンやクリスマスが近づくとそれらの起源を知ろうと資料を調べ、「思っていたのとは違う意味があった」「外国ではそれぞれ少しずつ違ったやり方でその日を祝っている」などと、わかったことを共有しようとする子どもが出てきた。それにより、行事の楽しみ方や意識に変化が生まれたことを振り返る声が多く見られた。

3 今後に向けて

他言語を含めた異文化理解の学習を進める中で、多様な他者の存在を知り、それを自分と結びつけながら背景を考えようとしたりそれまでのイメージを更新しようとしたりする姿は、徐々に見られるようになってきたと感じている。また、他の文化を知ることによって自己に目を向け、それまで問うことをせず当然のこととして受け入れてきたことを問い直そうとする姿も増えてきた。

すると、自然と「外国語を使って外国の人と話がしたい」と、実際にコミュニケーションを図りたいという声が大きくなってきた。それは、「外国語」が子どもにとってただの異言語ではなく、それを使って生きている人が見える「生きたことば」となって子どもたちの中に存在するようになってきたからではないだろうか。来年度は、これまで大切にしてきたことを土台としながら、外国語を「使う」ということにも重点を置き、外国語科の1年目を迎えたいと考えている。

(参考文献)

- Barnett, R. (1997) Higher education: A critical business. McGraw-Hill Education
- Canale, M. (1983) Language and Communication: Longman
- Canale, M. and M. Swain(1980) Applied Linguistics 1

(濱)